＊　　教師という進路～大瀬さんとの出会い～　　北林裕太

僕は、これまでに数多くの貴重で忘れることのできない出会いに何度もふれてきた。

「出会い」というのは、必ずしも人と人とが直接出会うことだけではないと思う。見たり聞いたり、人が人の存在を知ること、今まで知らなかった人のことを新たに知ることを、「出会い」と呼ぶのだと思う。そして僕は、これまでの出会いの中でも、とくに心に残るほどの人に、一冊の本を通して出会った。その人とは大瀬敏昭さん。神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校の初代校長をされた方である。

いつものように本屋へ行き、並べられた本を見ていた時、一冊の本が目に止まった。『いのちのリレー・ある教育者の〝生きた証〟を綴るノンフィクション』。すぐ手に取って読み始めた。大瀬さんは、末期ガンで余命宣告を受けながらも、ずっと教壇に立ち続け、子ども達に命の尊さを伝えようと、自らの体を「教材」にして子どもと向き合ったのだ。そして、そんな大瀬さんの授業は、いつしか「いのちの授業」と呼ばれるようになった。

自分の体を教材として、少しでも命の尊さ、生と死の意識について伝えたかった大瀬さんの生き方に、すごく感銘を受けた。教育の世界では、どうしても「死」はタブー視される傾向がある。「明るく強く」だけを押しつけるのでは、他者の不幸に悲しみの涙を流す心まで乾いてしまう。だからこそタブーとされた死の世界を少しずつ解放し、自分の体を教材として、やせ衰えていく姿を見せて命の尊さを伝えたいのだと、大瀬さんは最後まで教師として生きた。この姿には僕はすごく勇気をもらった。最後まで自分の信念を貫くことの大切さ、素晴らしさ、そして何より教師という仕事のやりがいを学んだ。

今の教育の世界には数々の問題がある。けれども何があろうと諦めず、大瀬さんのように満足のいく人生を送りたいと思う。この出会いを忘れずに頑張っていきたい。

この作品は、畿央大学の高校生エッセイ・コンテストの佳作になりました！

私たちにとって「死」を見つめることは、とても大切なことだと思います。でも簡単なことではなくて……。なかなか自分から進んで機会を求めるというわけにはいきません。